

「学校と社会をつなぐ調査」から 見えること

——どんな高校生が、大学、社会で成長するのか？変化の激しい現代社会において、日本の若者をタフに育てていくためには、教育は何をすればよいのか？

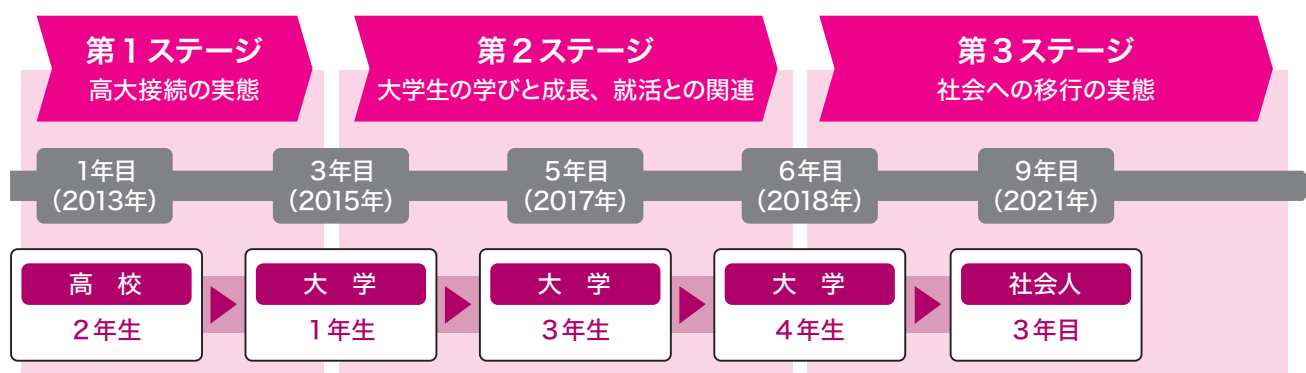
こうした切実な思いから、2013年度より河合塾と京都大学は共同で「学校と社会をつなぐ調査」（通称：10年トランジション調査）を開始しました。全国の高校、教育委員会にご協力いただき、45,311名の高校2年生の成長を約10年にわたり追跡調査する、前代未聞の壮大なプロジェクトとなりました。

調査の企画・分析者の溝上慎一先生が桐蔭学園へ移った後も調査は継続し、この生徒たちが社会人3年目となった2021年12月に最終調査を終えました。

この10年間で、アクティブラーニングが広がり、新学習指導要領が実施され、探究活動にも取り組むようになりました。また、コロナ禍により、“変化の激しい現代社会”という言葉がより現実味を帯びたことでしょう。

今回の企画では、10年にわたる追跡調査から見えてきたこととして、特に高校教育に関連した分析結果について、Part 1で溝上慎一先生に解説していただきました。Part 2では、鷗友学園女子中学高等学校の先生方にも参加いただき、意見交換を行いました。これらの記事を通じて、新しい時代における学校教育の役割と機能を再考します。

調査実施の流れ



CONTENTS

- Part 1 調査結果解説 “キャリア意識”と“学習態度”に着目して p39
 - 桐蔭学園理事長・桐蔭横浜大学教授 溝上慎一 先生
- Part 2 研究者×高校教員 意見交換会 p44
 - 溝上慎一 先生 × 鷗友学園女子中学高等学校の先生方

Part 1 調査結果解説 “キャリア意識”と“学習態度”に着目して

将来の見通しを持った大学進学が極めて重要 高校の探究学習が高大接続を力強く媒介する

桐蔭学園理事長・桐蔭横浜大学教授 溝上慎一 先生



Point

- ✓「資質・能力」は成長するが大きな変化はない
- ✓アクティブラーニング外化が初期キャリアに影響する
- ✓探究学習、キャリア教育が学校教育と社会をつなぐ

「学校と社会をつなぐ調査」に至った背景

1990年代以降、日本では大学改革が進みました。キャリア教育や今呼ぶところのアクティブラーニング（以下、AL）などの教育改善も進み、2008年には中央教育審議会が「学士課程教育の構築に向けて」という、いわゆる学士課程答申を出しました。この答申では、大学の学士課程共通の学習成果に関する参考指針として、学士力という概念が示されました。これは高校の学習指導要領という資質・能力に相当するといえます。その後の大学の教育改革は、この学士課程答申に沿った形で進んでいます。

大学での教育改革が一定程度進む中で、2010年頃から、大学では、主体的な学習態度が希薄だったり、AL型の授業に適応できなかったりする入学直後の1年生の存在が課題となっていました。小中学校ではグループワークや発表をする授業が広がって授業改善も進んでいましたが、本当に資質・能力を育てる授業には至っていないのではないか、という問題意識を持ちました。

私のこれまでの研究結果から、18歳、19歳時点での資質・能力は、その後の発達や自己形成等に大きく影響すると考えました。そこで、できれば全国的に広く、多くのデータを集めて一般化し、知見を社会や高校に対して示すことで、高校から大学、そして大学から初職への移行（トランジション）を支援することができないだろうかと考えたのです。これが「学校と社会をつなぐ調査」を行うことになった背景です。

実際の調査は、全国の高校、教育委員会の協力と河合塾の支援を受けて、2013年に378校の高校2年生45,311

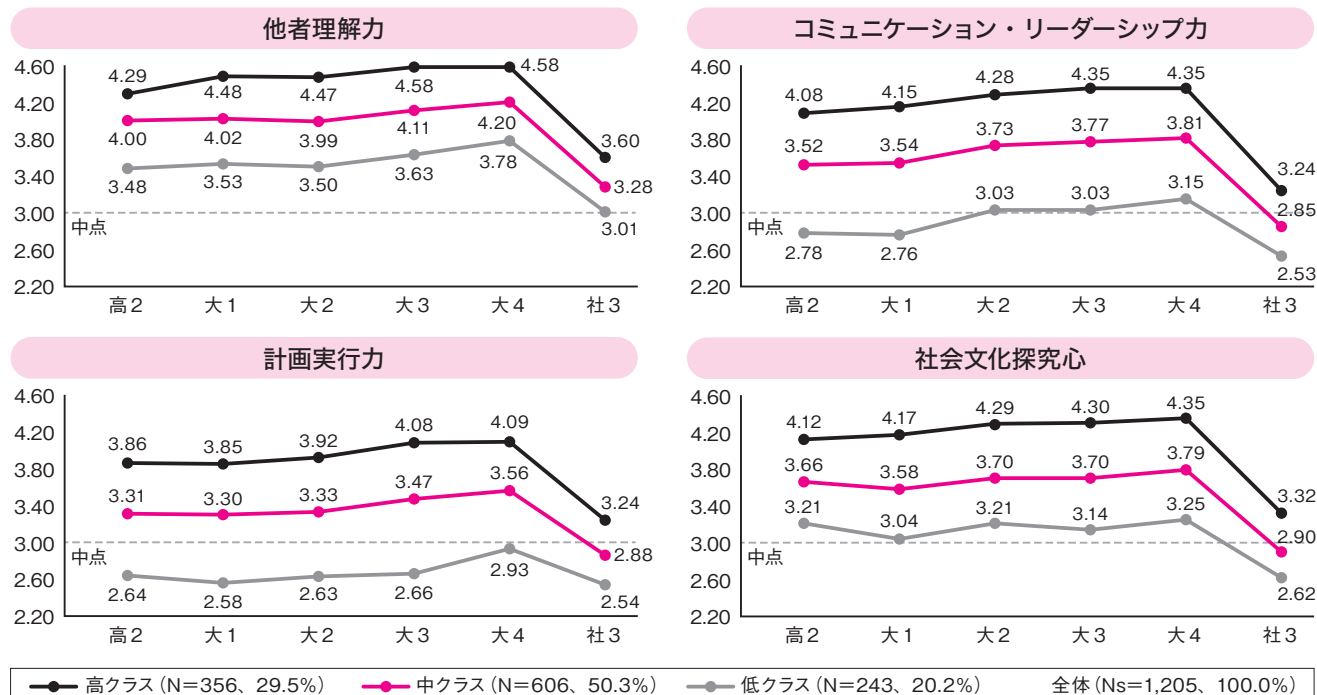
名が参加して始まりました。そこから、大学1年生、2年生、3年生、4年生と調査を続け、最終的には2021年時に社会人3年目の1,486名が調査に参加してくれました。いずれも現役で大学に進学して、新卒で社会人になった方々です。参加者はさまざまな高校から広く参加していますので、とりわけ意欲が高いとか、いわゆる学力が高い人達ばかりではありません。その点ではある程度偏りのないデータが得られたと考えています。

この調査結果におけるポイントの1つはキャリア意識です。将来のことを考えるというのは能力です。中学、高校で自分のキャリアをしっかりと考えてこなかった生徒は、大学生になっても考えないのです。そして、もう1つのポイントは、アクティブラーニング(AL)です。他者と議論しながら自分の考えを構築したり、理解を深めたりできることは優れた能力の1つです。私は京都大学で長く教員をしていましたが、優秀な学生でも就職活動で思うような結果が得られないケースを見てきました。そのとき、ポイントとなっているのはこのALです。どれほど頭が良くてどれほど良い考えを持っていても、他者に伝えられないことにはそれが生きないのです。

資質・能力は成長するが、大きな変化はない

本調査における最も大きな問いは、高校2年生で見られた資質・能力が、本当に大学入学後にも変わらないのか、伸びないまま社会人になってしまうのか、ということ。そこで、高校2年生から社会人3年目までの資質・能力の変化をグラフ化したものが、**<図1>**です。「他者理解力」「計画実行力」「コミュニケーション・リーダーシップ力」「社会文化探究心」の推移で、ここで

図1 資質・能力の変化（高校2年生～社会人3年目）



(『学校と社会をつなぐ調査』最終成果報告書)より)

※高／中／低のクラスは、資質・能力に関する回答をそれぞれ得点化してその平均値と分散でクラス分けしたものの。なお、この4つの資質・能力は、1つの項目への回答だけではなく、複数の項目への回答から統計的に作った合成変数である。

は高／中／低のクラス別にしています。

「他者理解力」は人の話を聞くことができるなどの基本的な力です。「計画実行力」は、物事への取り組みを計画的に粘り強く進められるかなどで、勉強への取り組みはこの変数に強く現れます。「コミュニケーション・リーダーシップ力」は、自分の言葉で人と議論できるか、リーダーシップを取れるかなどというALに関係した変数です。「社会文化探究心」は高校でいう探究学習とも関連の深い変数だと考えてよいでしょう。

こうした資質・能力は、大学入学後に新しい環境の中でさまざまな出会いがあり、自身の世界も広がり、大きく伸びることも考えられましたが、グラフからは結果としてクラス移動していないことが分かります。高校2年生のときの資質・能力のクラスは、大学に入った後もほとんどが同じクラスのままでした。ただ、大学で学年が上がるにつれて、少しですが得点が上がっています。このプラスの傾きは統計的にも有意なものでした。つまり、クラス移動するほどには変化はしませんが、そのクラスの中では得点が上がります。これは私達が日常で見ている生徒、学生の成長といってよいと思います。

ところで、社会人3年目になると急にグラフが落ち込

んでいます。この理由は、社会人になると外部から与えられる評価基準が厳しくなることと、仕事の現実と直面した際のリアリティ・ショック^(注)などの影響ではないかと考えられます。現在、調査に携わった研究者間で議論を進めています。

学びと成長に関わる5つの変数

調査では、学びと成長に関わる多くの変数を検討しましたが、結果を分析する中で学生たちの学びと成長に関わる重要な5つの変数が絞られてきました。

そのうちの1つが「二つのライフ」として測定している「キャリア意識」です。これは、「あなたは自分の将来についての見通しを持っていますか」という質問と「あなたはその見通しの実現に向かって、今自分が何をなすべきか分かっていますか。またそれを実行していますか」という2つの質問への回答で測定していて、自身の将来の見通しと、そのための行動を表す指標となります。キャリアには、ワークキャリアとライフキャリアの2つがありますが、高校生や大学生の場合には、仕事に関するキャリアのほうをイメージしやすいというこれまでの調査結果があります。キャリア意識は細かく見ると、

(注) リアリティ・ショック…新しい環境・組織に参入した際の期待と現実とのギャップのこと。

生き方や家庭や趣味との両立などさまざまありますが、ここでは細かく尋ねずに、大きくくりでどのようにとらえているかを尋ねています。

大学教育や大学生の意識等の研究をしてきた中での実感ですが、学生たちは将来のことはかなり考えています。学生たちに尋ねれば7割ぐらいの学生は考えていると回答します。ただ、実際の学生たちの日常の行動を見ていると、目標に向かって行動しているようには見えないことが結構あります。おそらく高校生でも同じだと思います。つまり、将来について考えられることは良いことですが、一方でそれを日常の行動に落とし込む必要があるのです。日常の中でその目標に向かって努力ができていかどうかが重要です。大人もそうですが、目標と行動をつなげられている人は成長します。自分で立てた将来の目標に向かって頑張っているのだから、成長実感も得られます。私達は、高校生や大学生の成長のためには、将来を考えることに加え、それに向けた行動まで、生徒や学生に求める必要があります。「二つのライフ」はそれを測定します。

2つ目は「**主体的な学習態度**」です。授業には意欲的に取り組む、レポートや課題を少しでも良いものに仕上げようと努力する、発表する際にはどのような質問にも答えられるよう十分に調べるなど、複数の質問への回答から作成された変数です。こうした学習における主体的な関わりは成長に大きくつながります。

3つ目は「**アクティブラーニング(AL) 外化**」です。外化とは、文章や発表などを通じて、自分の頭の中にある思考を外に出すことです。これは思考の共有化にもなります。「議論や発表の中で自分の考えをはっきりと示す」「根拠を持ってクラスメイトに自分の意見を言う」「クラスメイトに自分の考えをうまく伝えられる方法を考える」という質問への回答から変数が作成されています。単にグループワークに取り組むだけではなく、議論によって自分の理解が深まるように外化できているかがポイントです。

4つ目は「**授業外学習時間**」です。これはそのまま時間数を用いています。各種の調査では、日本の大学生は1週間の平均が大体4～5時間です。本来は15～20時間は必要だといわれていますので非常に少ないといえます。

5つ目は「**成績**」です。「履修した科目の80%以上が

優(80点以上)の成績である」～「履修した科目の20%以下」「その他」までの6件法で問い、最も近いものを選んでもらいます。

AL外化が初期キャリアに影響

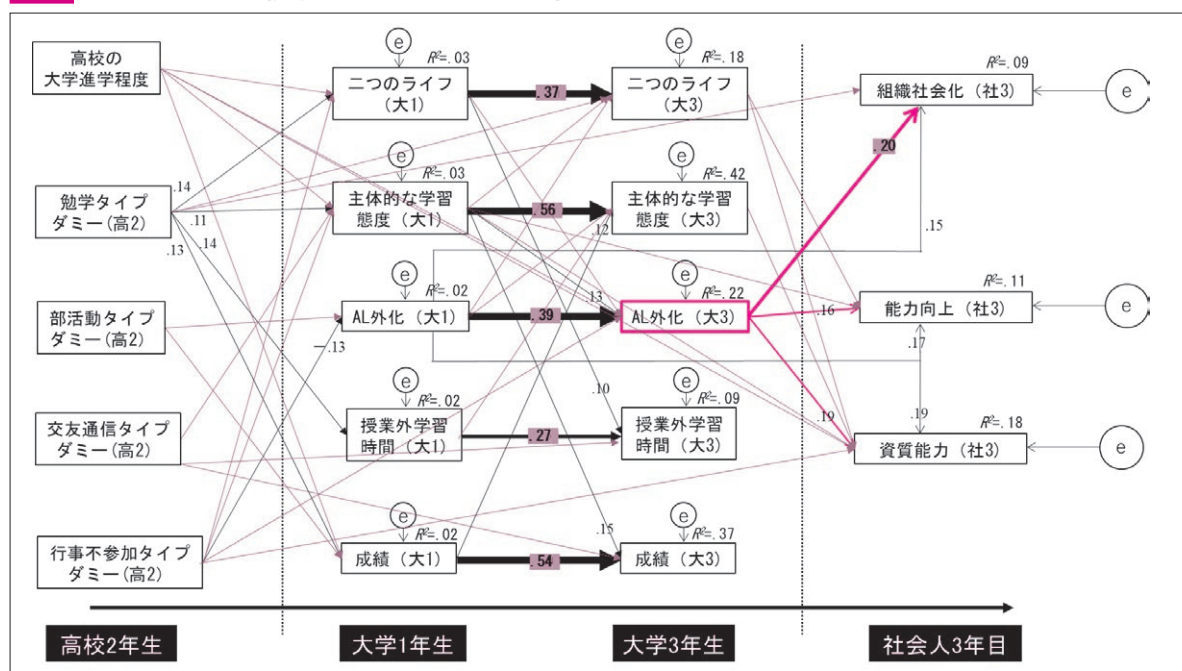
学びと成長に関わるこれら5つの変数と社会人3年目のパフォーマンスへの影響を分析したのが<図2>です。社会人3年目はまだ初期キャリアの段階ですので、厳密に仕事ができるかどうかを測る変数ではありませんが、分析では社会人3年目の「組織社会化」「能力向上」「資質・能力」への影響を見えています。パス図で矢印に付されているパス係数は、変数間の相関や因果などの関係を表す値です。

ここでいう「組織社会化」は、「自分の職務に必要な用語をマスターしている」「仕事をこなすうえで必要なスキルや能力を十分身につけている」「職場内の人間関係を把握している」などの質問への回答から作成された、職場に適応しているかを測る変数です。「能力向上」は、業務の進め方を工夫するなど職場における業務能力向上の意識を示しています。「資質・能力」は<図1>で示した4つの力です。

分析する前にはさまざまな仮説を立てていましたが、初期キャリアに最も影響していたのは、「AL外化」でした。キャリア意識が高かったとしても、「AL外化」ができていなければ初期キャリアはうまくいかないという結果です。ここで示されているパス係数ですが、これまで同種の教育調査でパス解析を行ってきた経験では、一般的に.20以上の値はなかなか出ません。そのため学術的には、パス係数.20でも大きな影響を与えているパスであると議論されます。このパス係数から、「AL外化」が「組織社会化」に与える影響は非常に大きいことが分かります。

さらに、このパス解析からは、大学1年生と大学3年生での学びと成長に関わる5つの変数の関係も分かります。たとえば、「主体的な学習態度」の大学1年生から大学3年生へのパス係数は、.56です。また、「成績」も.54ですので、.20でも大きい数値であることを考えると、いかに影響が大きいかが分かります。見方を変えれば、大学1年生から大学3年生までで、「主体的な学習態度」や「成績」は変化しにくいということです。「成績」が

図2 パス解析の結果（高校2年生～社会人3年目）



（『「学校と社会をつなぐ調査」最終成果報告書」より）

※高校2年生の「勉強タイプ」、「部活動タイプ」などのタイプは、2013年第1回調査の結果、平日・休日の1週間の過ごし方や、学校や日々の生活、友だち関係などへの回答から統計的に分類した7つの生徒タイプの一部です。生徒タイプの分析から見てくる高校生の特徴や詳細は、書籍『どんな高校生が大学、社会で成長するのか』（溝上慎一責任編集、学事出版）をご覧ください。

変化しにくいという傾向は他の文献でも見られる特徴ですが、今回の調査でも同様の結果が得られたわけです。同様に「AL外化」.39、「二つのライフ」.37、一番低い「授業外学習時間」でも.27あります。

AL外化する態度や能力の変化

＜図2＞のパス係数から、「主体的な学習態度」は大学1年生から大学3年生まででほとんど変化しないと説明しましたが、「AL外化」は「主体的な学習態度」に比べるとパス係数が小さいため、大学生の間で変わりにくいがまだ変化する可能性があるものと説明してきました。その変化がどれぐらいなのかを示したグラフが＜図3＞です。

この＜図3＞のグラフを見ると、＜図1＞とは異なり、クロスする波形があるのが分かります。「AL外化」に関しては、高クラス、中クラス、低クラスをそのまま維持する人たちに加えて、低クラスから高クラス、低クラスから中クラス、低クラスからさらに下がる低低クラスが抽出されます。このようにクロスする波形の人たちは、大学1年生から4年生までの間で変化した人たちです。低クラスから高クラスのような大きく成長した人たちも見られます。やはり、変化する人たち、成長する人たち

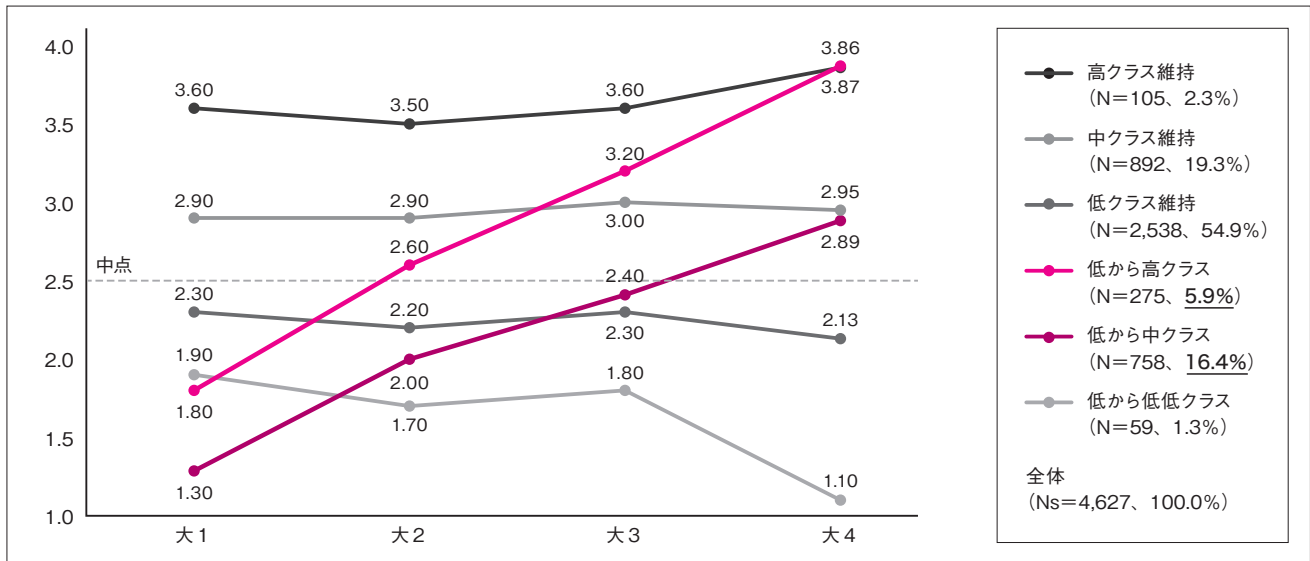
は確かに存在することもあります。

ただ、クラス移動した人たちを全部足しても23%です。つまり、77%の人たちはクラスが動いていないということです。パス係数.39でも変化した人たちは23%ですので、「主体的な学習態度」.56の場合は、ほとんど変化がなくクロスする波形は出てきません。このようにわずかに変化は見られるものの、やはり全体としては大きな変化が見られないという結果となっています。

探究学習が高校教育と大学教育をつなぐ

本調査の開始時は、高校2年生時の生徒タイプや資質・能力等がそのまま社会人3年目のパフォーマンスに影響するのではないかと考えていました。高校卒業時の姿や能力が社会人になってからの有り様まで決めてしまうような強さを持っているのではないかという議論をしていましたが、＜図2＞のパス解析ではそのような結果は出ていません。ただ、係数は小さいものの、高校から大学、大学から社会の各段階にパスは出ています。つまり、高校から大学、大学から社会の各段階で、間接的な影響を積み重ねているのです。このことと前述の「二つのライフ」「主体的な学習態度」など、学びと成長に関わる5つの変数とを考え合わせると、高校教育に対して

図3 アクティブラーニング外化の変化（大学1年生～4年生）



※図1の資質・能力と同様に、複数の項目への回答でクラス分けした。詳細は「『学校と社会をつなぐ調査』4時点目成果報告書」を参照。

いくつかの示唆が得られます。

まず、大切なことは、将来の見通しを持ってないまま、大学進学をさせることはできるだけ避けてほしいということです。高校で将来の見通しを持ってない人は、大学に進学した後も見通しを持ってないままになっていることが多いのです。そうした学生は、大学入学後に苦勞することになりますので、高校におけるキャリア教育は非常に重要です。

もう1つは、高校における「総合的な探究の時間」の重要性です。時間をかけて問いを立てて考えることは、大学でもプロジェクト学習を推進するなど力を入れていきます。私は探究学習が、高大接続を力強く媒介する役割を担うと考えています。探究学習を通して、主体的・対話的で深い学び（AL）とキャリア教育を一層充実させることが、高校生、大学生の成長には欠かせないものになってくると思います。前段で資質・能力の1つとして「社会文化探究心」を示しました<図1>。統計的に見ても、将来のことを考える人は社会のことも考えます。逆もしかりで、社会に関心を持つ人は自分の将来のことも考えます。探究活動に熱心に取り組む人は、自分の将来や社会のこともしっかりと考えるという関係性はあります。

一方、最近は探究学習に成果を求めすぎているのではないかと危惧もあります。高度な内容を求めたり、コンテストなどでの結果を求めたりするようなことも見受けられます。それよりも、問いを立てるなどの課題設定や探究プロセスの習得に注力してほしいと思います。そして、自分の関心や研究が、社会の中でどういう意味を

持つのかを考える力を育むことが大切です。

学校だけで必要な知識を教えることは困難に

最後に、これからの学校教育の新たな大きな課題として教育・社会のデジタル化があります。コロナ禍におけるオンライン授業の広がりやGIGAスクール構想などによって、教育のデジタル化が急速に進んでいます。また、DX（デジタルトランスフォーメーション）による知の爆発が学校外でも起きています。これがさらに進めば、子どもたちに将来必要とされる知識を学校だけで教えることはできなくなるでしょう。

実は大学でも、社会が求めているような最先端の知識のすべてをカリキュラムとして教えることはできていません。では、大学で教えない最先端の知はどこにあるのか。それはオンライン上です。あらゆる最新の研究成果やデータがオンライン上にあふれています。大学、大学院も含め、学校で学べることは基礎です。それ以外で自分に必要な知識は、自ら積極的に取りに行くというような主体的・探究的な学びの姿勢が必要になります。

どのような知識や情報が自分のライフにとって必要なのか、それを学校に頼らず判断していく鑑識眼が学習者に求められています。主体的・探究的に学ぶ生徒は、学校で基礎的な知識・技能・態度を学び、学校外で最先端の知識・情報を得るようになります。それができる生徒とできない生徒では差が生じます。そうならないためにも、必要な資質・能力を探究学習中心に育てていくことが、学校教育に求められているのではないのでしょうか。

対話的に学ぶことで生徒のキャリア意識は深まる 日常の課題に前向きに取り組むことが基礎になる

Point

- ✓ 中学、高校での教育は大学と社会につながっている
- ✓ 生徒が日々の学びに前向きに取り組めることが大切
- ✓ 未来社会を意識しながら生徒の将来を一緒に考える

Part 1では、将来の見通しを持ってないままでの大学進学はできるだけ避けるべきであることや、探究学習を通じて主体的・対話的で深い学びを充実させることの重要性が示されました。

Part 2では、調査開始時からの協力校である鷗友学園女子中学高等学校の先生方に、こうした示唆を高校現場としてどのように受け止めるか、どのように教育につなげていくかについてお話をうかがいました。

出席者（本文中敬称略）

- 桐蔭学園理事長・桐蔭横浜大学教授
溝上慎一 先生
- 鷗友学園女子中学高等学校
福井守明 先生（教頭・社会科教諭）
井村洋子 先生
（前学習研究係係長・高1学年主任・理科教諭）
永井茜 先生
（学習研究係係長・高2担任・国語科教諭）

キャリア意識の醸成をどう支援するか

溝上 「学校と社会をつなぐ調査」からわかることとして、高校におけるキャリア教育と、探究学習を通じた主体的・対話的で深い学びの充実の重要性をあげました。まず、キャリア教育に関して、貴校で大切にしていることなどはありますか。

福井 大学進学でのミスマッチを起こさせないことです。大学進学は学校としての大きな使命の1つですが、それだけで終わりではなく、大学と社会につながる学びをしようと生徒には常に伝えています。この考えは生徒や教員に浸透していると思います。キャリア教育では、生徒に意識づけを行うタイミングに関心があります。中心学年である高校2年生は、秋の行事の前後で自己肯定感が変わるように感じています。

井村 生徒たちには、未来に対してワクワクする気持ちを持ってほしいと思っています。文系、理系、芸術系などの選択の際には、「大学受験がいよいよ始まる」と、未来に対して明るい表情で前向きでいてほしいのです。ただ、いよいよ本格的に卒業後の進路を考えなくては

けないと、不安を感じる生徒もいます。社会に出ることはワクワクする楽しいことだと、どうやって伝えたらいいのか難しさを感じています。

溝上 将来のことですから不安に思うのは無理ありません。私は不安を無理に取り除く必要はないと思っています。ただ、生徒の取り組みから出てきた成果物や発言などについてしっかりと見ていくことは大切です。ここでは、良し悪しの質を見るのではなく、さらに学びが深まるように見ていきます。ここが知識を伝達するだけの教育や指導とは決定的に違うところです。私は教師にもアクティブラーニング（以下、AL）的な学びや社会との関わりが必要だと思っています。

福井 本当にその通りだと思います。コロナ禍になって、生徒は大人にも解決できない問題が目の前にあることがわかりました。生徒たちが知っている大人には、答えを出してくれるイメージがあったと思いますが、悩める大人がいることを今の高校生が体感できたことはとても大きいと思います。先日、ある生徒が、今の自分を未来につなげるためにも、もっと勉強を頑張ると連絡をくれました。コロナ禍で何を信じればよいのかわからなくなり、

信用がこれからの人の判断基準として価値を増すと考えたそうです。学力から得られる証明書は信用に繋がることにやっと気がついた、と言ってくれました。社会とのつながりによって、自分が学ぶ意義を考えることにつながった好例だと思います。

大学での学びは職業と直結しなくても 考え方や世界観を作る基礎となる

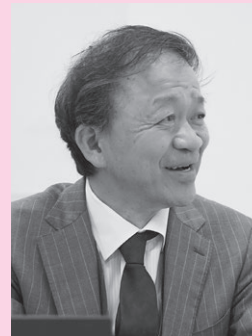
溝上 仕事という点ではいかがでしょうか。

永井 生徒を指導して思うのは、将来を思い描かせることの難しさです。生徒が日常で触れることができる職業や学問はごく一部です。触れたことのない職業や未来について、どうやって考えてさせていくのか。私自身は、自分が生徒時代によく触れた教師という職業にしか就いていないわけですし…。しかも今はどんどん新しい職業が増えています。

溝上 確かに難しいと思います。大学での学びが仕事に直結するのは、法曹界や医療系など国家試験がある分野や専門職を除いて、ほとんどないと言ってもよいかもしれません。私は学生には、知識は自分の考え方や世界観を作る基礎として学べばよく、それ自体が将来の職業にそのまま役立つと考える方がよいと話しています。知識はどんどん変わっていきます。ただ、知識を通して考えたことや自分の考えを言葉で外に出していくこと、それは将来必ず役に立ちます。企業内での仕事というのは、目の前の課題にコミットして、さまざまな人たちとプロジェクトを組み、問題解決に向けて対話しながら自分の考えを外に出していくことですが、これはALそのものです。そのため、一つひとつの授業や、一つひとつの場面で課題を理解し、自分の考えを作っていく、問題解決していく、これを繰り返していけば必ず力がつくと説明しています。

福井 企業で採用担当をしている方からうかがったのですが、ここ数年、学生に大学時代に力を入れたことを聞くと、個人での取り組みを言うことが多いそうです。クラブ活動での取り組みも減っています。そう考えると、皆で議論する、話し合う、協働して頑張って取り組むことで育成できる力について、高校の役割は大きいのではないかと思います。

溝上 今の就職活動は本当に難しいと思います。たとえ



福井 守明 先生

教頭 社会科教諭

「生徒の将来と一緒に考えることは、教員自身のキャリアを考えることにつながります」

ば、通信会社に就職しても通信とは関係のない事業部で仕事をすることもあります。企業が生き残りをかけて新規プロジェクトを次々と立ち上げるためです。配属先や、その先の将来を思い描くことは、ほぼ不可能と言ってもよいでしょう。本当に特定の仕事にこだわるのであれば、自分で起業するしかありません。

福井 そうなると、将来のことを考えることは大切ですが、高校では、自分の日常にある目の前の課題を前向きに捉えて取り組む、というのがベースになるのかと思います。

溝上 そうですね。将来のことばかりを考える必要はありませんが、考えないのはいけません。バランスが重要です。将来のことを必要なときに時々考え、それを日常につなげて取り組むことが大切です。頑張ってもうまくいかないことが少なからずあることは知っておいた方がよいですが、頑張ったプロセスは将来に必ず役立ちます。

福井 本校の卒業生には、どんな状況でも楽しめる強さがあってほしいと思います。

周りとの対話でキャリア意識がより深まる

溝上 日常の中で将来について考えることにつながった取り組みなどがありますか。

井村 昨年度、高校3年生を担当したのですが、始業式の自己紹介で、クラスのために何を貢献してくれるかを一人一言で話してもらったときに、新聞を毎日読んで気になった記事を発表すると言ってくれた生徒（以下、Aさん）がいました。朝礼もしくは終礼で発表するのですが、Aさんが素晴らしかったのは、記事に対して、過去に学習した授業の内容と結びつけて意見を発表してくれたところです。さらに、Aさんが意見を言って終わるの



井村 洋子 先生

前学習研究係係長
高1学年主任 理科教諭

「生徒たちには、自分の未来
に対して、ワクワクする気
持ちを持ってほしいです」

ではなく、Aさん以外の生徒がそれに対して意見を言うようにするとより深まるのではないかと、他の先生から助言を受け実施してみたところ、皆が活発に意見を出すようになりました。そして嬉しいことに、夏休み中も続けたいので、この取り組みのためのクラスルーム（Google Classroom）を作ってほしいと言ってきまして、夏休み中も生徒たちの自主的な活動が続きました。こうした活動の中で、たとえば、18歳になって選挙権を持った生徒が、「ちゃんと政党のことを知って投票に行き、自分たちの意見を社会に伝えたい」と発言するなど、活発に意見交換が行われていました。非常に生徒の成長が感じられ、私自身、教師になってよかったと実感する出来事でした。

溝上 Aさんはクラスに素晴らしい貢献をしましたね。大きな相乗効果が生まれたと思います。

井村 この活動で進路変更する生徒も出てくるなど、Aさん以外の生徒にも変化がありました。何よりAさんが大きく変わりました。もともとは医師志望だったのですが、活動を通じて医学と工学を融合させた分野に興味があることに気づけたと、卒業式のときに言ってくれました。やはり、勉強を1人だけをするのではなく、周囲と対話することによって、より自分の中に深く落とし込むことができるのだと改めて感じました。

福井 他にも、現代社会の授業で、自分でテーマを選んで夏休みにレポートを書くという課題を出すのですが、その中に捕鯨反対の生徒がいて、実際にくじら料理のお店まで話を聞きに行きました。するとお店の方は誠実に対応してくれた上に、くじら料理を食べたことがないと言う生徒に料理まで出してくれたそうです。異なる考え方に触れて、その生徒の考え方にも変化がありました。

こうした“大人の本気の場”に関わることができる機会を作るのは、高校のキャリア教育にはとても必要なことだと思います。

溝上 それは探究そのものですね。そこで深く考えたこと、言葉にして他者に伝えたこと、これらは将来の礎になっていくでしょう。

複眼的な思考を養うための 教科横断的な取り組み

溝上 これからのキャリア教育を考えたときに、高校ではどんな取り組みが大切だと思いますか。

福井 これまでのキャリア教育は、「どんな仕事があるか」「どんな職業に就きたいか」といった点に多くのウェイトが置かれていました。ですが、これだけ社会が変わると先も読みづらいので、生徒に本当に興味のあるものを見つけさせて、真剣に学ばせることがペースになるのだと思います。また、大学でも学際的な分野が増えていくことからわかるように、物事を複眼的に見ることが大事になると思います。本校には、教科横断でいろいろな教科の先生が一緒になって学習を考えるという「学習研究係」があり、新しいチャレンジを始めています。

井村 たとえば、英語と物理の合教科で、火星に住んだらどうなるかという物理的な視点をもとに英語で対話する授業を実施しています。また、高校1年生全員参加で大々的な教科横断の取り組みを実施して、各生徒が何を見てどう考えたのか生徒同士でシェアすることで、自分とは異なる視点を知る機会も設けたいと計画しています。

溝上 大学でも学際系学部を設置は以前から行われていますが、それを高校で取り組んでいるのは素晴らしいことです。大いに楽しむとよいと思います。生徒の意見の根拠を聞いてあげて、皆で共有して話し合うなどの活動は、ICTを使えば簡単にできます。

福井 ICTでいうと、本校はBYOD（Bring Your Own Device）を進めています。始める前にはさまざまな意見がありましたが、生徒は我々以上の力を持っています。

井村 高校1年生からBYODをスタートした学年の生徒に、中学生がBYODを始めるにあたって気をつけるべきことなどについてアンケートを実施しました。最初は教員側でアンケートを集計するつもりでしたが、生徒たちに投げかけてみたところ、アンケート集計どころか、1

週間で『BYODのすゝめ』という冊子を作って持ってきました<図1>。マナーとして必要なことや、学習での便利な使い方などが盛り込まれた大作です。レイアウトもポップで、もう教員を超えています。教員は種をまいただけです。アンケートは約240人分ありまして、その大量なデータを自分たちだけでうまくまとめているのです。

溝上 生徒は学校の中だけではなく、学校の外でも学んで技術や技能を習得、活用しているのですね。

主体的・対話的で深い学びをどう評価するか

溝上 次に、主体的な学習態度についてお聞きしたいと思います。私は主体的・対話的で深い学びが探究につながるイメージを<図2>のように考えています。習得の段階では教師の役割のウェイトが高いのですが、探究では生徒主導のウェイトが高くなります。ただ、一方で探究には取り組んでいても、ALが定着していない学校もあるようにも思います。この点はいかがでしょうか。



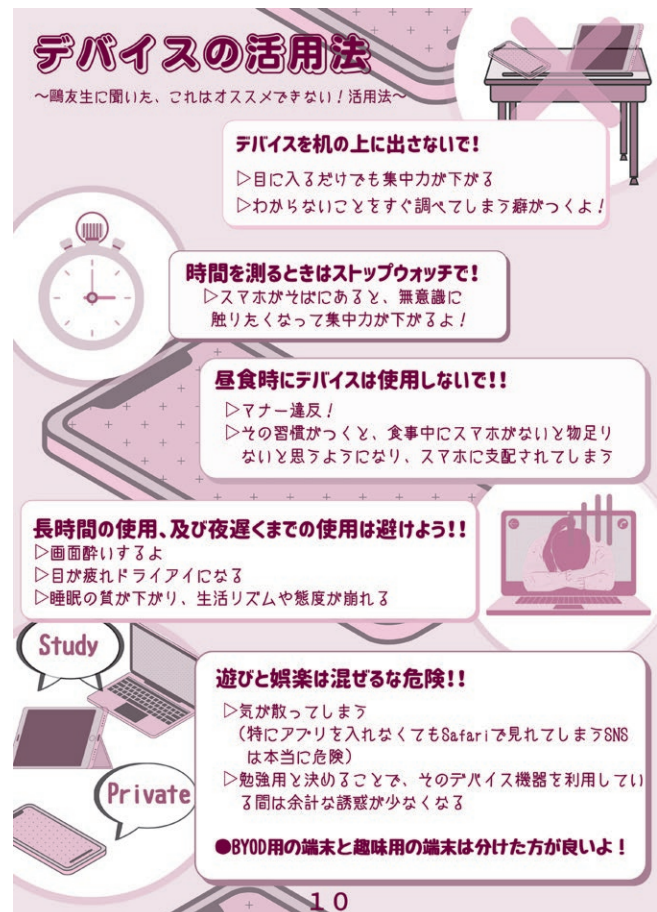
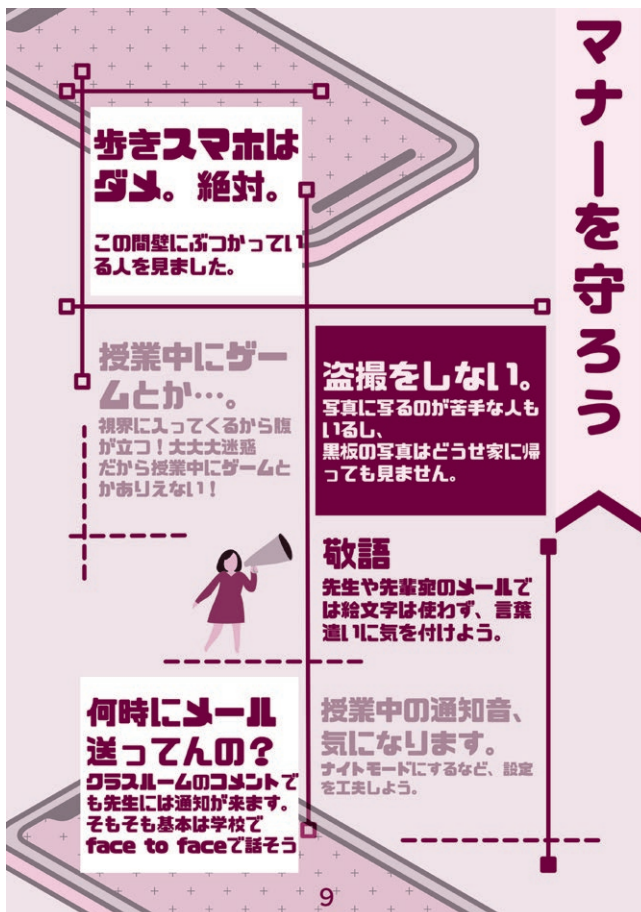
永井 茜 先生

学習研究係係長
高2担任 国語科教諭

「大人が種をまいたり、本気の姿を見せたりすることが大切だと思います」

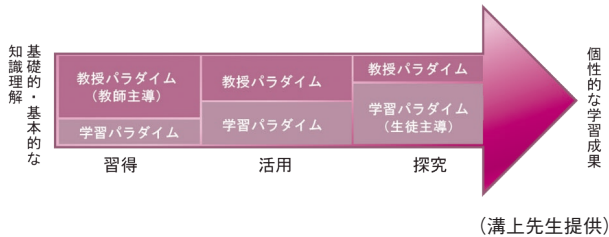
福井 本校でもALはかなり定着したので、今はそれをどう評価するのか、というステージだと思っています。観点別評価を意識し、教科によっては、どこまでが知識・技能でどこからが応用なのかということを、問題で分けるなどの方法をとったこともあります。そんなにきれいに段階的に上がっていくのか難しいところもあります。

図1 鷗友学園の高校生が中学生のために作った『BYODのすゝめ』（抜粋）



(鷗友学園女子中学高等学校提供)

図2 教授パラダイムと学習パラダイム



井村 たとえば、本校の場合、理科では実験書（独自に作成したテキスト）がありますので、実験の考察がどれぐらい書けているか、実験のときにちゃんと手を動かしているかなどは見ればわかるので、教科内で共通認識を持つようにしています。

福井 単元別だと評価基準を作りやすいのですが、今度は学校としての評価基準との整理が難しくなります。現状では、学校教育目標のカリキュラム・マネジメントの観点から、教科のルーブリックに合わせて評価するようにしています。

将来を考えることは生徒だけの課題ではない

溝上 最後に、調査結果や本日の議論への感想などをお願いします。

井村 中学・高校での教育の大切さを改めて認識しましたし、それが大学と社会につながっていることをデータで確認できましたので、今後の教科指導やホームルーム活動をこれまで以上にしっかり考えないといけないと思いました。それと同時に、私たち教員もアップデートしていく必要性を強く感じました。

永井 生徒には日々の学びにしっかり取り組ませ、その上で大人が種をまいたり、本気の姿を見せたりすることが大切だと思いました。結局、大切なことというのは普

遍的なものだと思います。また、生徒の日々の学校生活の中で、学びを統合する機会をいかに作ることができるかも重要です。その1つが合教科の授業だと思うので、これからもしっかりと考えていきたいと思います。

福井 キャリアを考えると、今までは社会が変わらないという前提でしたので、経験のある大人が生徒を支援してあげる役割だったと思います。ですが、今はその前提が崩れています。つまり、将来の社会をどう考えるかは、生徒だけではなく我々大人にとっての共通課題でもあるのです。生徒に寄り添って一緒に将来を考えることは、教員にとっても自分のキャリアを考えることにつながっていると思います。また、これまで教員にとって経験年数は優位性でしたが、そうはならなくなってきています。意識の変革や発想の転換が、ベテランの教員にも求められているのだと思います。

溝上 先行世代から後続世代への継承が成り立たなくなっているのかもしれませんが、世代を超えて一緒に議論ができるような交流が大切になりますね。

本日はありがとうございました。



『学校と社会をつなぐ調査』の詳細はこちら！

- 10年間の調査概要
- 過去のイベントレポート
- 高校2年時～社会人3年目調査の成果報告書
- 関連書籍のご案内

<https://www.kawaijuku.jp/jp/research/sch/>



2023年8月末、最終報告を中心とした書籍を発刊予定！